

## 真夏の夜の訪問者

蒸し暑い真夏の長い日がようやく沈み夜のとばりが降りる頃、人の訪問を告げる玄関ベルが鳴った。郵便配達人であった。Aは手渡された郵便物を見ると都内に住む心当たりのない司法書士から差し出された書留書簡であった。転居した旧住所から転送されており少し時間がたっていた。不審に思いながらAは開封、斜めに読むと遺産分割の調整という全く寝耳に水の内容であった。何かの間違だと不審に思いながらあらためて読み直すと少し思い当たる節があった。Aからこのことをメールで相談受けたのは翌日令和4年7月下旬のある日の夜9時少し前でした。

Aとは防大時代は全く面識がなく、久留米幹部候補生学校に入って同じ区隊になり、ベッドの上下で苦楽を共にするうち自然と親しくなった。彼は頭の回転が速く試験前でも就寝時刻にはベッドに入る人であった。運動もでき、特に持久走競技が得意で私はライバル意識を持って競い合ったが、常に彼に負けたが周波数が合い互いに好感を持つようになった。

久留米を卒業しAは関東の郷里に近い部隊に、私は九州に赴任し一時途絶えた。今ほど簡単にメール送信ができる時代でなかった。時は過ぎ45歳ころ同時期北海道で再開、互いに単身赴任で会う密度が濃くなり酒を飲みながら話す機会もあった。ある時Aが生い立ち等を話すうち私とは全く別世界で育った話をした。久留米以来今日に至る約60年間互いに人生を語り合える数少ない3本の指に入る友人で今でも毎朝メールの定期便が入り・入れ消息を確認している。

別世界のAの生い立ちを簡単に述べると、戦争最中私と同じ昭和18年に東京下町で生まれ、出生3カ月後に母上が夫から離縁されたという。下町の小町と言われる美人で上品な母上は某新聞社報道カメラマンと結婚し彼は3男として生まれた。父親はやがて戦地のジャワ・スマトラ等の南方に派遣され日本を留守にしていた。その間某有名歌舞伎役者に手籠めにされた（極最近間違いと分かり、カメラマンの実子であることが証明された。）という根も葉もない理由で突然離縁され途方に暮れる親子を是非にという男性が現れ母は再婚し彼は養子となった。

Aは地頭（じあたま）が良く進学先は東北大学を希望していたが、異父の勧めで防衛大学校に入ったという。異父と母の3人での生活は平和で普通の家庭であったようだ。ただ幼児から独りで過ごす時間が長く活発とは言い難い性格はこの時期生まれたようであるが、決して暗い性格ではなかった。私も人づきあいが下手で寡黙なAと共に久留米では猛烈にしごかれる訓練に耐え1年を過ごした。Aは高良山登山競争では2分30秒上位（10%以内）の成績を残し、1500mトラックでは4分30秒、私のベストは5分ジャストで相手にはならなかった。

繰り返すが時が経って、45歳を超える頃私は札幌勤務に彼は千歳部隊に同じ時期赴任、互いに単身赴任で一段と親密度は深まった。ある時酔っていたAは自分には腹違いの妹がいて航空会社にシュワデスで勤務しているらしいが会ったことはないと話した。身の上話は田舎者の私には浮世離れたものに見えたが真実らしいようであった。この女性は生涯独身を通し自分の住む家屋敷の他100坪の土地と相当な貯金を残して70歳頃逝去した。実はこの女性の弟（Aとは異母弟）が実姉の遺産相続をしたいが、相続放棄をお願いしたいという内容の書留郵便であったようだ。細部は省略するが試算によるとその相続資産の1/7程度（金額にして1千万以上）がAの懐に入るようだが、約80年間行き場のない屈辱を耐え抜いたAには当然の事と思っている。ただ、今に至るもこの遺産相続は円満な解決したとは聞いていない。残念である。